

The Tenda
Journal

天台ジャーナル

広報天台

2004年(平成16年)
8月1日 日曜日 (毎月1日発行)

1部 50円 (消費税込・送料別)
発行所/天台宗出版室
発行人/出版室長 工藤 秀和
〒520-0113 大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内
電話 077-579-0022 (代)
Eメール/T-Press@tendai.or.jp

一隅を照らす運動推進会報

<一隅推進会員>
年会費 (2500円) 中に会報
(天台ジャーナル) 購読料を含む。

北陸・東北地方豪雨水害被災者の
皆様に謹んでお見舞いを申し上げます

天台宗
一隅を照らす運動総本部

◎ 比叡山宗教サミット17周年

世界平和祈りの集い——8・4

テロと武力の即時停止を



栄養失調で苦しむ子どもを抱く母親 (アフリカ・スーダン難民キャンプで)

©ロイター・サン

世界には、テロや戦争をはじめ、貧困や差別、人権抑圧等で、虐げられた生活をおくる人々がいる。誰もが、平和に暮らせる地球をめざして、今年も対話と祈りが続く――

対話を続ける宗教者

比叡山宗教サミットは、一九八七年に「世界の主な宗教指導者が一堂に集い、教義の違いを超えて、世界平和と人類への幸福への祈りをささげよう」との趣旨で開催された。

以来、十七年が経過した。サミットで決議された「平和を求める精神」にはいささかも変わりがないが、私たちが取り巻く環境は激変した。冷戦の終結により、民族紛争が多発し、多くの犠牲者と難民が発生したことは深刻な問題となった。特に平和への

流れを大きく変えた最も悲劇的な事件は、9・11テロを始めたとするテロリズムの頻発と、それに対するアフガニスタン、イラクへの戦争であった。大国による単独行動主義と、報復のための自爆テロによる抵抗が激化し、泥沼化の様相を示している。

中東紛争は、平和的な話し合いではなく、テロや武力によって問題解決を図ろうとする傾向が強まっている。しかも、キリスト教社会とイスラーム社会との宗教対立が指摘されたことが、なお混

乱に拍車をかけた。私たちは9・11テロに対して国際社会に広まりつつあったイスラームへの誤解を払拭するため、二年前の十五周年記念のサミットを「平和への祈りとイスラームとの対話集会」と題して開催した。

乱に拍車をかけた。私たちは9・11テロに対して国際社会に広まりつつあったイスラームへの誤解を払拭するため、二年前の十五周年記念のサミットを「平和への祈りとイスラームとの対話集会」と題して開催した。本年の集いも、ねばり強く宗教者どうしの対話を続け、平和を求め、祈ることに主眼がおかれる。

天台座主 平和祈願文

要旨

今、世界は数世紀に一度という、大きな歴史の転換期を迎えつつあるように見えます。

イラク戦争は、戦闘終結宣言が出されてから一年以上が過ぎ、また六月には主権委譲が行われましたが、依然として戦闘とテロの応酬が繰り返され、日々犠牲者が増え続けております。イラクの問題はパレスチナ問題と結びついて、次第に民族問題へと移りつつあり、今後とも緊張状態が続くのではな

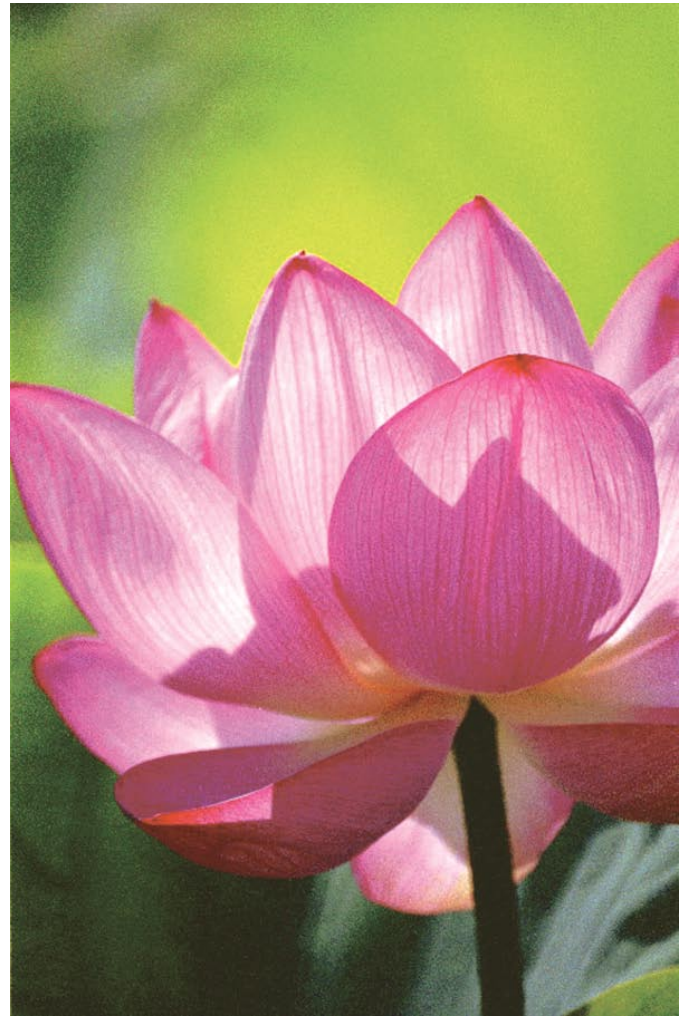
いかと憂慮にたえません。また中東では、イスラエルとパレスチナに対する国際社会の平和への努力もむなしく、再び血で血を洗うような武力行使と自爆テロが繰り返されるに至りまし

同じテーブルで話し合いを

た。双方の不信と憎悪は、極限に達し、指導者の暗殺や、民族の殲滅という戦慄すべき事態に至りつつあり、その原因に宗教が指摘されております。

しかし、戦争というものは、いつも大義や正論の裏に、野望と独善を隠していることを知らねばなりません。

宗教は、戦争やテロに正当性を与えるのではなく、強い抑止力になるべきものであります。神仏を殺戮の正当性に使った戦争は、必ずや人類を憎悪の連鎖へと追い込んでゆくであります。う。私たちは、武力行使やテロにより目的を達そうとする政治指導者と宗教指導者に、ただちにその愚かしい行為を停止するように呼びかけたいと思います。そして同じテーブルについて話し合うことを求めたいと思います。そのために、本日、皆様方と共に真摯な祈りを捧げたいと存じます。



花想 風言

会社勤務のころ、新聞の日曜版で「世界の旅」という企画があった。元インド特派員経験の私にも仕事のおはちが巡ってきた。花はハスとシヤラ。広いインドでハスにまつわる話を探し、古い石像に行き当たった。お釈迦さまと同時代に活躍したジャイナ教開祖の一人、ヴァルダマーナさんがハスの台座に座っていた。仏像に良く似ていたのだから、思わず合掌したらおちんちんが丸見えの全裸像だった。

そういえば玄奘の旅行記に「裸形外道」とあるのはジャイナ教の修行者をも含めるのだろうか。尊像があるビハール州のパワプリは紀元前五世紀、ジャイナ教開祖のマーハーヴィーラ涅槃の地で、

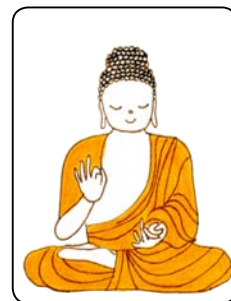
第5回 ハス 福田徳衍 (文・写真)

彼を火葬した土を集った信者たちが争って持ち帰った跡に広く深い池が出現した。池面には見渡す限り、白やうす桃色のハスが競うように咲いていた。

池の畔で「ハスが開くときにポン」という音が果たしてするのか」と、仲間のインド人も動員して四日間、夜明け前から補聴器持参でがんばったが、誰の耳にもそれらしい音は聞こえずじまいだった。

明治、大正時代の文豪が小説やエッセイに書いているハスの開花音は、きっと風流な人の心の中で「ポン」と鳴って花が開いたのだろう。

◆プロフィール
一九三六年東京生まれ。十二歳から二十一歳まで比叡山で小僧生活をして過ごした。元朝日新聞社記者。信越教区新潟部・徳法院住職。俗名 福田 徳郎。



はなさんが描いた薬師如来
(ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう・東京書籍刊より)

書問師は、従来のカレンダーでは、書の部分を担当されておられました。独立して墨書カレンダーを担当して頂きます。また、今回、初めて絵と文字を担当するはなさんは、NHK教育テレビで「新日曜美術館」の司会やヤクルト・シヨア、ハナマルキのCMでおなじみです。趣味はお菓子づくりと仏像鑑賞で、著書の「ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう」では、独特の、しっとりポップな仏像を描いています。「博物館などで、ガラスケースに入れられていた仏像は苦手。なんだか、仏さまが呼吸困難で、こちらまで息苦しくなる」という感性に期待しています。完成と、皆様へのご案内は十月の予定です。

鬼手仏心

枝豆

天台宗出版室長 工藤 秀和

岩波書店を発展させた功勞者、小林勇が、枝豆の話を書いています。

初夏に小林が歩いていると、向こうから枝豆を下げた婦人がやってくる。彼は、初対面の婦人に深々と礼をして、こう聞くのである。「自分の大事な老先生が、この先に住んでいる。老先生は季節のものを愛し、特に枝豆は大好物である。その枝豆はどこで手に入れたか?もし、私にもそれが手に入らなければ教えていただきたい。」

昭和二十一年のことだ。敗戦後で、食べるものがない時代である。枝豆は貴重品であつた。婦人は、分けてもら

うことは不可能だといふ瞬間にものを思う表情をしたが、その半分を小林の手に押しつけて「これは、差し上げます」といつて足早に去つてゆくのである。

こうして得た枝豆は、老先生の食卓に上がる。小林が持参したことを聞くと、老先生は「そいつは、豪気だ」というのである。

老先生とは幸田露伴のことだ。露伴の喜ぶ顔と、夕闇に青々と浮かぶ枝豆が見えるような名文である。

その時のことを思うと、小林は「われながら、よくやった」と涙ぐむのだと書いている。それは、そうだろう。大

の男が、道ですれ違う婦人に「その枝豆はどこで手にいれたか」と聞くのは、恥をしのぐための行為である。だから、この「よくやった」という述べ懐は、昨今はやりの「自分を誉めてあげたい」というのは、大分に違うのである。であればこそ一方で瞬時にものを思う表情をしたのち、半分に「差し上げます」といつて足早に去つた女性も忘れがたい印象を残すのである。

なに、枝豆ごときのことで大仰な、というなけれ。師のために尽くそうとする小林の心と、その心を瞬時に理解する婦人の心が、胸にせまるのである。

来年の開運招福カレンダーは…

書問玄明師が書く
重厚でシンプルな
墨書版と

はなさんが描く
しっとりポップな
ビジュアル版で

天台宗の「開運招福カレンダー」来年版は、天台宗正観寺住職で書家の書問玄明師による墨書版と、タレントのはなさんが絵と文字を担当するビジュアル版の二種類を作成中です。



◎ はな プロフィール

1971年生まれ。上智大学比較文化科卒。17歳からモデルをはじめ、テレビの司会、エッセイ連載などでも活躍。レギュラー番組はNHK教育「新日曜美術館」など。著書に「ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう」(東京書籍)など多数。

使いやすく、また檀信徒の方々に配りやすい価格でというコンセプトで作成してきました。開運招福カレンダーは、毎年ご好評を頂いておりますが、更に年配の方から、ティーンエイジャーまで幅広く活用して頂くために、来年から大きく衣替えをいたします。

はなさんの話「仏像を見た時、描いたりするのは大好きですが、そのことで天台宗とご縁ができたのはとても嬉しい。カレンダーは、一年間使ってもらえるものなので、若い人にも、ご年配の方にも『素敵なカレンダーだね』と喜んでもらえるように、頑張つて描きたいと思つています。」





A Story in the Tendai

母と娘 尼僧二代「道心の中に衣食あり」

兵庫・普門寺住職 藤本 恵祐 さん



「悪いものは、足の鬱血（うっけつ）と共に流れていってしまっただけです」と語る藤本恵祐尼。赤穂・普門寺にて

仏と生きる

Vol.18

「その人は、行院で修行中に血行障害になり、足の爪が、真っ白になって、ひとつ、また、ひとつと抜け落ちてしまうたのや」と、何やらぞつとするような話を語るの、総本山延暦寺の真嶋康祐根本中堂輪番（前参拝部長）である。真嶋輪番が、行院の行監を勤めていた時、担当した女性修行者の話だという。「彼女は、そんな状態になっても、『どうあっても、とにかくやり遂げます』と歯を食いしばって、ついに二月月の厳しい行をやり遂げた。ここに来るまでは、専業主婦だった人。うぐん、なかなか出来ることやない。では、専業主婦を、そこまでの決意に駆り立てたものはいったい何だろうか。そのことを聞きたくて、現在、赤穂市で普門寺の住職を勤める藤本恵祐を訪ねた。

流浪の仏たちと母の寺

播州赤穂は、忠臣蔵の町だ。駅には四十七士の像が飾られ、赤穂城跡などゆかりの名所旧跡にはことかかない。浅野家が、東浜塩田の成功を祈願したという赤穂八幡宮の横道を右に登れば、普門寺である。「最近、尼僧でも、化粧したり、浮ついた人が多いが、恵祐尼は、そんなチャラついたところはみじんもない、道心のしつかりした人や」という真嶋輪番の言葉どおりの人だが、かといってカチコチの性格ではない。笑みを絶やさず、ざつざらんな話し方をする。

母・恵正尼は、僧になる前は貿易商の妻だった。一家は戦争のために、仕事を続けることができず、疎開を余儀なくされた。元貿易商だから着物や食料などの物資は持っていた。最初、農作物、野菜等を買って集まった人々は、次第に恵正尼に人生相談をするようになった。助言は、的を射ており、自然に庵のようになっていくという。

機銃掃射とお百度

ちよちよかなしづくすらすら

それでは、「修行に行く決意した時、家族はどのような反応でしたか?」
「主人は、渋々承知しました。子どもは三人ありました。一番下の男の子は十歳でした。その子が聞くのです。『お母さんが、何をしようとしているのか、よく分からないけれど、それで誰が喜ぶの?』返事に困って、黙っている。『誰も喜ばないの?自分か?』と誰か行くの?』というのです。私は息を詰めて聞いた。いかにも、母と子が真剣に渡り合う様子が伝わってくる。『それで、どう返事をされましたか?』
「ひよっとしたら、お婆ちゃんも喜ぶのかもわからない

平和の灯とステンドグラス

満行の日、比叡山で「行の鬼」と異名をとった故小林栄茂が声をかけた。「あんな、帰つたら、何するつもりや。考えなくても答はずらうと出た。『人の話を聞きたいと思ひます。お経も習いましたし、これで下手でもお経もあげることが出来ます。』
京都から相生駅までのJRに乗り、播州赤穂に帰った。赤穂浪士の討ち入りに近い日だった。跡取りだといわれていた僧侶は、その時にも、もう寺を出ていた。檀家のない寺で、母と二人の静かな生活が始まった。まもなく母は病に倒れ姫路の梅林寺に移っていった。

朝五時に起きて、仏さまにお経をあげる日々が続いた。気がつけば、ひとり、ふたりと後ろに座ってお経を上げる人が増えてきた。それが何十人にもなった。その人たちの話を聞いて、また拜む、その繰り返しのなかで、母も自分も苦労した。しかし飢えることもなく今日まで来るこ

本堂には、戦後、故西村公朝大仏師が修復した観音様と共に薬師如来様が安置されている。その縁で西村大仏師の命名と書になる「普門殿」の額が掛かっており、堂内には「日天 月天 慈光 散華」のステンドグラスがはめ込まれている。教会のように見えるが、形式よりも「心の安らぎの空間」の方がお参りする人のためにあって荘厳した。観音様の火を、広島原爆の火と合火し、「平和の火」と名付けて灯し続けているのは、二度と戦争を起さずにはならないという願いからだ。母・恵正尼は、昨年九十歳で遷化した。二人で「ささやかなしづくすらすら、流れゆけば海となる」と決めて生きてきた日々が思い出された。「母も本堂の落慶を見て満



本堂壁面を飾るステンドグラス「日天」(立花江津子氏・作)

恵祐が行院で修行を決意するのはそれから三十九年近く過ぎた昭和五十四年秋である。再び真嶋輪番の言葉を引く。「それまで主婦で暮らし、いきなり僧侶になるという。それが、ようやく恵正尼のもとで落ち着いた。」

はげ落ちる爪

僧侶とは、そんな甘いものではない。私が噂に聞いたところでは、跡継ぎにと期待していた僧もいたようだがうまくいかず、それならということのようだった。ずいぶん厳しく指導したが、よくつ

戦争が激化した頃、疎開先の土地は、前が寺で、横が神社という今の普門寺を彷彿とさせる土地だった。その日は静かだった。いつも鳴り響く空襲警報がその日に限って響かなかった。ところが突然、米軍の戦闘機が飛来し、機銃掃射が浴びせられた。目の前を、担架に乗せられた犠牲者が次々と運ばれていった。死の気配に体が震えた。

犠牲者の中に、赤ん坊を抱いた母親がいた。銃弾が、二人を貫通しており、二人とも死んでいた。横に、幼い男の子が付き添っていた。担架の端を握り「お母さん、お母さん」と呼んでいた。その子と

眼があった。戦慄した。気が付けば、自分は神社に入り、お百度を踏みながら「助けてあげて、助けてあげて」と叫んでいた。助かるわけでもない。しかし、理屈ではなかった。こみ上げるもの、震えるものがあつた。七歳だった。自分がその男の子と一体になつていった。いのちを感じた。「そのことを、どのように感じられますか。私は、その男の子のいのちがわかりました。人は、言葉をもって訴えなくてもわかることがあるのではないのでしょうか。修行を決意する前に、私は仏の声、母の声を聞いたように思いました。あるいは、そんな声はなかったのかも知れませんが、そんなことは、どちらでもよいことではありませんか?」

足してくれたと思います。これでよかったです。自分の心があさましくならないように、私たちがそう願って生きてきました。」
藤本恵祐のその言葉は、道心に到るプロセスもさりながら、それを持ち続けてゆくことこそが大事なのだ、という意味に聞こえた。
(文中敬称略)
文・天台宗出版室編集長 横山 和人

お便りを下さい

あなたの周りでの出来事、ご感想をお送り下さい。また、取材について「こんな出来事、あんな人々」をお知らせ下さい。
封書、FAX、Eメールで、天台宗出版室まで。連絡先は、題字横です。
FAXは、077-578-4814

スーダンへの緊急支援を

天台宗に支援協力を要請

UNHCR
駐日代表

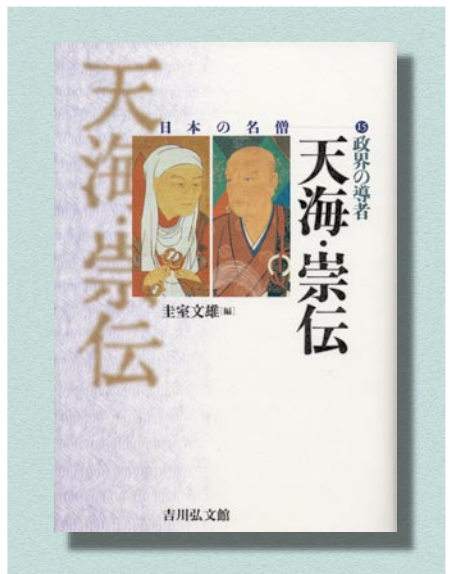
七月六日に京都で開催した、国連「高級諮問委員会」の地域会合に出席していた、国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所のパルコ・コウラル代表が、七月八日、天台宗務庁に来庁した。

握し、緊急支援をお願いしたい」と協力を強く訴えた。これに対し、天台宗からは内局の他、山田能裕WCRP難民委員会委員長が応対し、今後の支援の在り方について討議した。

は、天台宗が、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会を通じて、難民支援を行っていることについて謝辞を述べると共に、「今なお、内戦状態にあるスーダンの現状はあまり知られていない。しかし、危機的状況が続いている。一刻と変わる現地の情勢を把



日本の名僧『天海・崇伝』刊行
～「政界の指導者」にスポットライト～



このほど、吉川弘文館より「人物叢書」シリーズの一卷として「政界の指導者・天海・崇伝」（日本の名僧⑮・圭室文雄編）が発刊された。同シリーズは世評が高く、第十一回菊池寛賞を受賞している。これまでの「日本の名僧シリーズ」では教学的な面を中心として宗祖、高僧が語られてきた趣があるが、今回は天海、崇伝という、時の権力者の側近として権力中枢に位置した、いわゆる「黒衣の宰相」にスポットライトを当てているのが特徴。

徳川家康、秀忠、家光の三代に亘る権力者に仕え、政治を側面から動かした二人の僧

は互いに覇を競いながら江戸幕府創設期に活躍した。特に天海大僧正の足跡は、天台宗にとつては非常に重要な意味を持つている。天海大僧正は関東に天台宗の拠点・東叡山寛永寺を創建し、その後の天台宗の発展に大きな影響を与えているからである。

本書では政治の世界に深く関わりながら、僧として宗派の拡大発展に奔走した姿を複数の執筆者により多角的に捉

京玉
東崎
この程、東京教区と埼玉教区で「天台宗勤行儀」が新たに作成された。

オリジナル経典を作成

一隅大会や特別授戒会で活用

参加者に配布される。また、東京教区で制作された「おつとめ」は、開宗千二百年慶讃大法会期間中に使用される。同教区の一隅を照らす運動推進大会では、布教化活動の一環として、檀



六月十六日、横浜市鶴見区の鶴見会館を会場に、神奈川県特別授戒会が開催された（写真）。

雅楽の響き渡る中特別授戒会

秋には第二会も奉修予定

神奈川県 神奈川教

定になっている。今回神奈川県では、早期から準備委員会が組織され、「戒弟にとつて有意義な式」と各寺院が結束し、授戒会に臨んだ。



（報告・赤沼徳祐通信員）

平和への祈りを込めて
第二回 法華経読誦会を開催 岡山 山青 岡山



（報告・井上全正通信員）

平成16年度天台宗学校教職員中央研修会

一般受講者募集のお知らせ

期日：平成16年8月26日（木）

会場：真正極楽寺真如山荘（京都市左京区浄土寺真如町82）
電話075-751-8073

講師：イラストレーター・絵本作家 永田 萌 先生

演題：『夢みる力 いつまでも』

日程：13:30～受付 14:30～開講式
15:00～講演

交通：JR京都駅烏丸口の市バス乗場A1より5系統又はA2より17系統に乗車。錦林車庫前又は真如堂前で下車（所要時間約40分）。徒歩約10分。

参加費：無料。但し、教材代（書籍代）として1,575円をご負担下さい。

申込方法：住所・氏名・電話番号をご記入の上、はがき又はFAXでお申込下さい。
8月20日（金）必着。

申込先：〒520-0113 大津市坂本4-6-2 天台宗務庁内 社会課
電話077-579-0022/FAX077-579-2516

天台宗布教師会・関東信越地区協議会
布教研修会を茨城で開催
 開催地の特色を生かしたプログラム



去る六月十五日・十六日の両日、茨城県五浦において、天台宗布教師会関東信越地区協議会布教研修会が開催された。同地は、天台宗にも縁の深かった岡倉天心が、日本美術院再興の地としたところとして知られている。

本年の研修テーマは、開宗千二百年慶讃大法会のテーマである「あなたの中の仏に会いに」とし、「檀信徒の心を引きだす」ということに焦点を当てている。

また、第二講座では、大正大学の講師でもある茨城教区最勝寺住職・渡辺明照師が「十三仏と法事・現代仏事考」と題して、葬儀や法事の際に「人々にどのように仏の世界へ向き合ってもらおうか」として講義。

の特色を打ち出したい」との要望を汲んで、初日第一講座では昨年の高校野球甲子園大会の優勝校、茨城常総学院高校野球部の前監督、木内幸男氏を講師に招聘。木内氏は「野球を通しての人生の教訓（心をつかむ）」と題して講演（写真）、目的を持った人の心を如何に引き出すか、気持ちなどをどのように向けさせるか、ということを実体験を交えて披露し、参加者に感動を与えた。



翌十六日の第三講座では、齊藤圓真東京教区龍泉寺住職（大正大学助教授）が「なぜ宗教戦争は起きるのか？（北アイルランドにその事例を見る）」とのテーマで講義を進め、昨今のイラク戦争が宗教戦争の相を見させていることに言及、最新の実証的研究の

成果をからめての持論を展開した。研修会の両日は、梅雨の季節にもかかわらず快晴に恵まれ、太平洋を一望に出来る景勝地の会場で連日、テーマに沿った熱心な研修が進められた。（報告・本田純道通信員）

コンパス
 元天台宗宗務総長
杉谷義純



政治家とドロボー

したが、政権を取り国民の期待に応えるには、まだまだ超えなければならぬ。年金はもろろん、憲法や教育基本法、さらには国の安全保障について、人気取りでなく、党是として一本筋の通った現実的な政策を示し得るにかかっている。一方自民党はというと、ぬえ的な存在の公明党頼りで政

権運営をしていると、当座は間に合っているようにも、将来的に国を誤ることを危惧する。新宗教のみならず、支持基盤を構成している伝統仏教檀信徒の自民党離れもはじまっている。「人生いろいろ」などと小泉首相がいつているうちに、「覆水盆に返らず」にならなければ良いが。

さってお盆の季節を迎えた。先祖の霊を迎えて供養する盂蘭盆会の語源は、インドの古語ウラバーナから来ている。本来の意味は逆さに吊されたような苦しみという。釈尊の高弟で、超能力を備えた高僧目連を一所懸命養育し、母親の力ガミであった目連の母が死後餓鬼道に墜ちて味わった苦

しみのことである。世間的に見れば素晴らしい母が、何故そんな苦しみ合わなければならぬのか。世の中では、自分の本分に精励し、成果を上げれば、それは高く評価され、名誉や大金を得られることもある。しかし一方では本人が気がつかないところで、多くの人々を傷つけてい

ば、世間的には善であつても、宗教的に悪を免れないのである。人間とは、一所懸命になることによつて罪を犯しかねない不条理な存在である。釈尊はそのことを目連に説き、母の救済法を教えたのがお盆の起源である。釈尊の時代、インドでは国王と盗賊が同様に考え

られていた。すなわち昼間は国王の官吏が合法的に収奪し、夜は盗賊が荒らしていくので、両方とも災難だと経典にあげられている。やがてその国王の難を取り除くため僧達は立ち上がり、国王にも法を説きアシヨカ王のように仏教に帰依し、善政を行う国王が誕生する。日本の国民が政治に冷めているのは、政治家が命がけで職責を全うしようという気概に欠けていることを知っているからだ。このままでは政治家は宗教的に罪を犯すどころか、政治献金や税の無駄遣いで、ドロボーと同じ存在になってしまう。そうさせておく我々の責任こそ、いちばん重いという自覚が必要だ。

木葉のように反り上がり、そこかしこ雨漏りがしていました。どうしたものかと悩んでいた頃、他宗の役員がジョージ山本氏が「デンバー」に行つて、他宗の寺ではあるが、そのT先生に会つてみなさい」と薦めてくれました。

Tさんの所属するデンバーの寺は市の中心部にあり、堂々たる洋式建築で「山東三州仏教会会堂」という大きな表札が掲げてありました。「山東三州」とは、ロッキーマウンテンの東部に広がるコロラド州、ネブラスカ州、ワイオミング州の三州のことです。デンバーの寺がこれら三州の支院やその檀信徒を統括しているとのことでした。

各教区にお願いしている通信員から、次々と報告が入る。予想通り、熱い手応え充分。記事にリライトしながら、紙面に割り付けていく。本田（茨城）、赤沼（神奈川）、井上（岡山）の皆さん、有り難うございます●取材の依頼

お経の言葉が浮かんだ。これだと思った。それからはどんな貧乏にも耐えられたね。笑みを崩さず淡々と語るその顔には、五十年の風雪が刻み込まれていました。「屋根と言えは私の寺も……」と私はハワイの寺の状況を話しました。

じつと聞いておられた先生は隣の部屋から手箱のようなものを抱えてこられて、大粒のダイヤが入ったビロード張りの小さなケースから十個ほど取り出し、「このダイヤモンドをおみやげにあげるから、これを売って屋根替えの資金にしませんか」と言ったのです。私はダイヤなど手にとつて見るのは初めてですから、こんな高価なものを頂けるなんて夢ではないかと本当に頬をつねつてみたほどでした。

ところが……（つづく）頼相次ぐ。できるだけご希望に添うよう記者をやりくりします●今号は七月二十八日校了、その足で名古屋空港へ向かう。栢木寛照・三宝廷住職が自費で毎年行っている「青少年サイパン島派遣」の慰霊法要に同行取材するためである。まだサイパンの山中には、戦争で亡くなった人々の白骨が野ざらしのままなのだ●竜巻、猛暑、集中豪雨と異常気象続く。定義によれば、異常気象とは、三十年に一度あるか、ないかだという。どうも、毎年異常のような気がする。亡くなった方には、心よりお悔やみを、また被災された皆様には、心よりお見舞いを申し上げます。

天台トピックス

- ◎教師安居会 8月26日～8月29日 比叡山居士林 中央研修会
- ◎天台宗学校教職員 8月26日～8月27日 京都・真如堂
- ◎天台保育全国大会 8月26日～8月27日 岩手・中尊寺

- ◎天台宗ハワイ別院 荒了寛 聖人・奇人たち(前)
- ◎デスクから

環境問題をテーマに公開講座

この秋天天台宗務庁で開催

参加者募集中

自然とともに

—立松和平氏を講師に迎えて—



一隅を照らす運動総本部では、実践運動の三つの柱を掲げています。その中に『共生：地球に優しい生活をしよう』『生命：あらゆる命に感謝しよう』があります。そこで本年十月二日(土)、天台宗務庁・大会議室において、自然環境問題にも積極的に取り組まれている、作家の立松

和平氏を講師に「自然とともに」と題した公開講座を行います。

立松氏は、一九四七年栃木県宇都宮生まれ。早稲田大学在学中に「自転車」で早稲田文学新人賞受賞。宇都宮市役所に勤務の後、七九年から文筆活動に専念。八〇年「遠雷」で野間文芸新人賞、九七年「毒

一風聞・田中正造」で毎日出版文化賞受賞。二〇〇二年三月には、歌舞伎座上演「道元の月」の台本を手がけ、第三十一回大谷竹次郎賞を受賞。行動派作家として幅広く活躍されています。

この機会に是非ともご参加いただき、一隅を照らす運動や環境問題を再認識していただきたいと思えます。

【日時】平成十六年十月二日 午後一時受付・二時開演

【会場】天台宗務庁大会議室

【定員】三百名

【参加費】無料(要予約・定員になり次第〆切)

【申込方法】ハガキ・FAX・E-mailにてお申込みください。(電話不可)

【問い合わせ先】〒五二〇一〇一三 滋賀県大津市坂本四一六一二 天台宗務庁内

一隅を照らす運動総本部

北陸・東北地方で集中豪雨被害

天台宗の災害対策本部設置

七月十三日に、新潟県上越地方、また七月十八日には福井県嶺南地方を集中豪雨が襲い、新潟・福井を中心に福島県等で、甚大な被害に見舞われた。

今回の被害は、死者が十八名、住宅全壊五十戸以上、住宅半壊二百戸以上、床上・床下浸水住宅二万五千戸以上にも及び、ライフラインが寸断された世帯も多い。これに対し天台宗では災害対策本部(西郊良光本部長)を設置、

TEL・〇七七―五七九―〇〇二二(代)
FAX・〇七七―五七九―二五一六

E-mail: ichigu@tendai.or.jp
http://www.tendai.or.jp/ichigu/

インドの現状訴える

—東海大会に100名—



法天・マナケ師が「インド禅定林の活動について」と題し講演(写真)。

六月二十九日、東海本部(村上圓竜本部長)は、名古屋市の安保ホールを会場に、檀信徒總會及び一隅を照らす運動推進大会を開催、約百名が集った。

檀信徒總會に引き続き行われた推進大会では、インド禅定林住職、サンガラトナ・ヤ・メッタ子ども家では五十五人の子どもを預かっており、子どもたちには仏教の教え、忘己利他の精神を教えていきたい」と話し、孤児院運営、また禅定林大本堂建設支援も訴えた。今大会で集められた浄財は、地球救援募金事務局に寄託された。

水害被災地に対する復興義援金の協力を

一隅を照らす運動総本部

は、すでに災害救助法が適用された新潟県の三市一町、福井県の二市三町に対して総額三百三十万円の義援金を送金しているが、被災地の復興をさらに支援するために、天台宗と一隅を照らす運動総本部では、復興義援金の協力を呼



福井市内・西木田で(7月22日・対策本部撮影)

びかけている。

送金方法(郵便振替)
口座番号01050011
69505・加入者名・一隅を照らす運動総本部地球救援募金事務局。受付期間は平成十六年九月十五日まで。

墨跡展の収益を都院地球救援募金に

七月二十日、天台宗務庁において、京都・三千院門跡(小堀光詮門主)の大島亮幸執事長から西郊良光一隅を照らす運動理事長に、同院で開催されたチャリティ―墨跡展の収益金の一部二十万円が手渡された(写真)。

この墨跡展は、宗内外の高僧が筆を揮われた書などが陳列されたもので、毎年六月に開催されているあじさい祭り



と併せて行われており、三千院の恒例行事となっている。収益金は、地球救援募金事務局に寄託された。

素晴らしき言葉たち

作者は、当時小学校一年生です。おもわず、微笑んでしまふ。いそうな、かわいい言葉です。

庭に咲いた、あさがおに呼びかけて、それに、あさがおさんも、優しく答えているのだと思いました。

でも、解説を見てびっくり。少女は、花に呼びかけているのではなく、種に呼びかけているのです。つまり、これは夏の詩ではなくて、冬の詩なんです。

冬に、あの小さく黒い種に向かつて「おげんきにいますか」と呼びかけ、黒いあさがおの種さんも「はい、いますよ」といっているのです。種を蒔けば、やが

て芽が出て、夏にあさがおの花が咲きます。種はいのちの源です。その思いで、もう一度読んでみると「なんと、すごい感性!」と驚くほかありません。

人間ばかりではなく、この世に生きているものたちには、みないのちがあります。一隅を照らす運動ではその活動の柱のひとつに「共生」をあげています。

みな共に生きていこうという姿勢です。

咲きほこる花たちに「げんき」と呼びかけるのも、それはとても素敵ですが、種に「おげんきにいますか」と呼びかけるなんて、断然素晴らしいではありませんか。

『あさがおさん』 藤根 優子
あさがおさん おげんきにいますか はい
いますよ
「いわて'93詩と児童文学大会」の花巻市長賞受賞作